

科学技術の潮流

JST研究開発戦略センター

③

URA導入

生き残りを賭けた競争が進む時代にあつて、世界中の大学が社会から選ばれるため、

大学を特徴づける研究のブランド化を進める。世界大学ランキングなどの競争を意識する（垂直的差別化）とともに、他にはない個性をつくらう（水平的差別化）と改革を強める。そのやり方は多様で、小規模でも産学連携で多くの成果を上げる大学もあれば、近畿大学のマグロ完全養殖の成功のように、研究の成果を押し出す大学もある。大学のブラン

ド力が持つ影響は大きく、生徒・学生の大学選択、若手研究者の所属選択、企業などの連携選択にも及ぶ。この外部から変革を迫られる状況で、同時に学内からは研究環境の改善を強く求められ、大学の学長はより

高度で複雑な研究経営を迫られるようになった。既存体制で賄えない新たな大学機能について、日本は2011年頃からリサーチ・ア

提案が重要

人的ネットワークを形成し、そこから仕事のヒントを得てきた。

の共有やFAとの対話など多くのセッションを催す。それでも海外に目を向ければ、米国ではFAとURAが競争的資金制度の改善を協議し、欧州ではURAが科学技術政策の提言を堂々と行っている。日本のURAも見習うべ

年頃からリサーチ・アドミニストレーター（URA）の仕組みを導入。今では全国で1000人近くのURAが各大学の研究力強化に取り組み。研究者や企業からの転身者、女性が多く、今多くの浮かばない。おのずとURAは組織を超えてのグッドプラクティス

事に取り組みべきか。UR Aはどのような仕

研究力強化のため、UR Aはどのような仕

配分機関のこと）、企業

の企画担当者など

の学差に比べて、学

が各大学の研究力強化

スに依存するのみだ。

「アドミニストレータ

もでき、年

次大会は600人超の

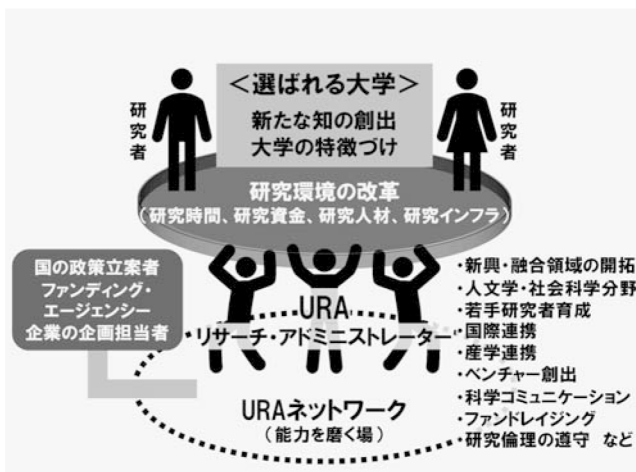
（金曜日に掲載）

選ばれる大学へ “研究のブランド化” 進む



科学技術振興機構（JST）研究開発戦略センター 特任フェロー（科学技術イノベーション政策ユニット） 丸山 浩平

東京農工大学大学院工学研究科修了。機械メーカーで研究開発、技術企画などに従事した後、大学に移りバイオセンシング研究を経験。09年からは一貫して大学の研究力強化など研究マネジメント業務に従事。現在、早稲田大学リサーチイノベーションセンター教授。博士（工学）。



選ばれる大学であるための仕掛け